

令和6年(2024年)度 学長賞

	表彰区分	所属	職名	氏名
1	教育活動	教育学研究科	教授	白松 賢
		教育学部	教授	中本 剛
		次世代人材育成拠点	特定准教授	加藤 晶
2	教育活動、研究活動	教育学部	教授	隅田 学
3	教育活動	附属中学校	教諭	沖野 俊也
4	研究活動、国際連携活動	地球深部ダイナミクス研究センター	特別荣誉教授	入船 徹男
5	研究活動	医学系研究科	教授	木村 映善
6	研究活動	理工学研究科(工)	教授	神野 雅文
7	研究活動	プロテオサイエンスセンター	教授	東山 繁樹
8	地域連携活動	紙産業イノベーションセンター	特別荣誉教授	内村 浩美
			教授	藪谷 智規
			准教授	伊藤 弘和
			准教授	福垣内 暁
			准教授	深堀 秀史
			講師	秀野 晃大
	地域協働支援部地域協働課紙産業チーム	チームリーダー	高橋 勇一郎	
9	国際連携活動	理工学研究科(理)	教授	座古 保
10	医療活動	医学部、医学部附属病院	救急航空医療学講座、救急医学講座、児童精神医学講座 薬剤部、看護部、診療支援部、医事課、栄養部	
11	大学運営	情報推進課	副課長	長曾我部 昭寿
12	大学運営	人権センター 壽 卓三 前センター長 他11名		
13	その他(国際活動)	農学研究科	特定研究員	高松 さくら
14	その他(災害対応)	理工学研究科(工)	寄附講座教授	森 伸一郎
		社会共創学部	教授	NETRA PRAKASH BHANDARY
		理工学研究科(工)	教授	岡村 未対
		理工学研究科(工)	教授	森脇 亮
		農学研究科	助教	木村 誇
		理工学研究科(工)	特任講師	小野 耕平
	地域協働推進機構	特定准教授	大本 敬久	

*表彰区分順

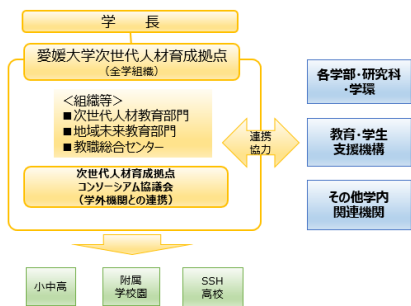
令和6年度 学長賞

表彰区分	教育活動
所属／氏名／職名	大学院教育学研究科 白松 賢 教授 教育学部 中本 剛 教授 次世代人材育成拠点 加藤 晶 特定准教授

【愛媛大学次世代人材育成拠点事業の推進】

取組概要

令和6年度に発足した次世代人材育成拠点は、全世代対応型「地域における知の拠点」としての愛媛大学の産官学協働の資源や取組を活用し、地域の持続的発展を担う次世代人材の育成や高大連携教育に貢献するとともに、関係機関と連携して実施する関連事業を統括し、実施に当たって必要な支援を行っています。



令和6年度より、次世代科学人材育成室、教職総合センターなどを統合し、学長直下の全学組織として、「次世代人材育成拠点」を設置し、次世代人材の育成や高大連携教育に取り組んでいる。

本拠点は、令和6年度概算要求（教育研究組織改革分）で、教育データ分析、次世代人材育成プログラム開発・実施、地域未来教育の機能強化を柱とし、全世代対応型の「地域における知の拠点」としての多機能化を図り、Sustainableな社会、Resilientな地域社会

の構築に貢献するという目的が評価され、採択されたものである。

本拠点の次世代人材プログラムの中でも JST 事業に採択されている以下2つの事業は、受講生が学会等で賞を取るなど、学内外から高い評価を受けている。

○「ジュニアドクター育成塾」（2期目）

科学技術イノベーションを牽引する傑出した人材の育成に向け、理数・情報をはじめとする様々な分野の学習を通じて高い意欲や突出した能力を有する小中学生を発掘し、さらに能力を伸長する体系的育成プランの開発・実施を目的とし実施している事業であり、平成29年度に採択され、令和3年度で1期目の5年間が終了したものの、それまでの実績が評価され、令和4年度には2期目の採択を受けている。

○四国型次世代科学技術チャレンジプログラム（SHIN-GS）

将来グローバルに活躍しうる傑出した科学技術人材を育成することを目的として、地域で卓越した意欲・能力を有する高校生等を募集・選抜し、国際的な活動を含む高度で体系的な、理数教育プログラムの開発・実施等を行うことを支援する事業であり、愛媛大学グローバルサイエンスキャンパス（eGS）の後継事業として、令和5年度から実施している。

表彰者3名は、令和6年度概算要求申請、令和4年度、5年度に採択された上記JST事業の採択・実施に携わり、次世代人材育成拠点事業の推進に多大な貢献を行った。

令和6年度 学長賞

表彰区分	教育活動、研究活動
所属／氏名／職名	教育学部 隅田 学 教授

ギフテッド教育研究拠点の形成

これまで我が国の学校において、特異な才能のある児童生徒を念頭においた支援の取組はほとんど行われてこなかった。文部科学省は令和4年に「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」審議のまとめを発表し、令和5年より「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」を開始した。隅田教授は、先駆的にギフテッド教育研究を開拓し、発信しており、国内外の関連学会、中央教育審議会や経団連等で関連研究実績を招待講演するほか、2022年に関連国際学会で Best Oral Presentation Award、2024年に Best Poster Presentation Award を受賞、上記の文部科学省新規事業に採択（全国1件）される等、国内外の関連分野のリーダーとして顕著な功績を挙げている。関連する子供向け講座(Kids Academia:2010年開始)、一般向け講座(Gifted Academia:2020年開始)も運営し、継続的に発信しており、コロナ禍にスタートした一般向け講座(Gifted Academia)も既に55回実施されている。

【文部科学省事業】

令和5年度 特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業（新規事業）

「(1)特異な才能のある児童生徒に関する研修パッケージの作成」採択（全国で1件）

https://www.mext.go.jp/content/20230403mxt_kyoiku02_000027147_001.pdf

令和6年度 特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業

「(1)特異な才能のある児童生徒に関する研修パッケージの作成」採択（全国で1件）

https://www.mext.go.jp/content/20240415-mxt_kyoiku01-000035034_1.pdf

【受賞等】

Sumida, M. (2022). Best Oral Presentation Award, *The 17th Asia-Pacific Conference on Giftedness*. 対象発表: Online STEAM education programme for gifted young girls during the COVID-19 pandemic.

Arai, S., & Sumida, M. (2024). Best Poster Presentation Award, *The 18th Asia-Pacific Conference on Giftedness*. 大賞発表: A context-specific emergence of children's difficulties and talents across formal and non-formal learning contexts.

【科学研究費補助金（代表）】

挑戦的研究(萌芽) (2023~2026) 「ノンフォーマルな特別科学教育が育成する異才とその教育資本」

基盤研究A (2017~2022) 「ジェンダー・地域格差に配慮したSTEAM才能教育カリキュラムに関する学際的研究」

【オンラインプラットフォーム】

Kids Academia: <https://kids-academia.com/>

Gifted Academia: <https://gifted-academia.peatix.com/>

令和6年度 学長賞

表彰区分	教育活動
所属／氏名／職名	附属中学校 沖野 俊也 教諭(学年部長・理科・ソフトテニス男子)

平成29年4月、理科の教諭として教育学部附属中学校に着任し、学級担任を3年、学年部長を5年務めています。その間、附属学校園で開催される愛媛教育研究大会において、理科の研究実践を全国に発信してきました。

その一方で、男子ソフトテニス部の顧問を務め、部員たちのほとんどがソフトテニス初心者であるにも関わらず、以下のような好成績を収め続けています。特に、令和5年度には全国中学校総合体育大会ソフトテニスの部において附属中学校史上初の団体戦出場を果たし、出場生徒は学長表彰(附属学校児童生徒等表彰)を受けています。

担任団をまとめ、学年全体に責任を持つ学年部長という重責を果たしながら、部活動においても生徒一人ひとりの力を伸ばしてきた卓越した指導力は、附属学校園の教員として範とすべきものであり、高く評価されるものです。

<ソフトテニス部主な成績> (団体の成績のみ)

平成30年度

松山市中学校総合体育大会<団体> 優勝

令和2年度

松山市中学生ソフトテニス大会<団体> 優勝

松山市中学校新人体育大会<団体> 優勝

愛媛スポーツ・レクリエーション祭2020(松山市選抜チーム)<団体> 第1位

令和3年度

松山市中学校総合体育大会<団体> 準優勝

中予地区中学生学校対抗ソフトテニス大会<団体> 優勝

令和4年度

松山・中予地区春季ソフトテニス大会

<団体(2部)> 第3位、<団体(3部)> 優勝、<団体(6部)> 準優勝

松山・中予地区秋季団体対抗ソフトテニス大会

<団体(1部)> 準優勝、<団体(3部)> 優勝

中予地区学校対抗ソフトテニス大会<団体> 第3位

松山市中学校新人体育大会<団体> 第3位

令和5年度

松山・中予地区春季団体ソフトテニス大会<団体(3部)> 準優勝

松山市中学校総合体育大会<団体> 準優勝

愛媛県中学校総合体育大会<団体> 第3位

全国中学校総合体育大会 <団体> 出場

松山市長旗争奪中学生ソフトテニス大会<団体> 準優勝

新居浜招待中学生ソフトテニス大会<団体> 第3位

令和6年度

松山市中学校総合体育大会<団体> 準優勝

令和6年度 学長賞

表彰区分	研究活動、国際連携活動
所属／氏名／職名	地球深部ダイナミクス研究センター 入船 徹男 特別荣誉教授

3月末に最後の指導学生もいなくなり、この4月からは研究員や若手教員らと細々と仕事をつづけるとともに、産業界との連携や国際連携に力をいれています。

研究活動に関連しては、この1年間で①国際高压力学会（AIRAPT）の P. W. Bridgman メダルの授与（2023.7 エジンバラ）とともに、②国際鉱物学会（IMA）の IMA メダル受賞者に決定され（授賞式：2026 南京）、③米国地球化学会・欧州地球化学連合の Geochemistry Fellow に選ばれるなど（2024.8 シカゴ）、過大な評価をいただきました。それぞれ①ヒメダイヤなど新物質の超高压合成、②地球深部の鉱物の相転移と物性変化、③マントル中不連続面の原因と沈み込んだ地殻物質の挙動に関して、本学で行った研究成果に基づいています。

一方で国際連携活動については、アリゾナ州立大における大型超高压装置の導入を支援し、同装置の完成記念ワークショップで特別講演を行いました（2024.1 フェニックス）。同装置は GRC の世界最大超高压装置 BOTCHAN-6000 と同型機で、いずれも新居浜の住友重機で作製されたものです。アリゾナ州立大は材料科学分野で全米のトップクラスで、GRC の強力なライバルになりますが、これを機会に連携を強め共同研究もすすめています。

また、2年に1度欧州・米州・アジアを中心に開催されている AIRAPT 総会を誘致し、2025 年秋に松山市で第 29 回総会が開催されることが決定されました。AIRAPT 総会は通常 500-800 名規模で行われていますが、このような規模の国際会議が地方都市で開催されることは稀です。地域の活性化に与える影響も大きいことから、日本政府観光局（JNTO）の 2023 年度国際会議誘致賞を受賞し、組織委員長として授賞式に出席しました（2024.2 東京）。

さて私こと、23 年間にわたり GRC センター長を務めました。この3月にはその任を終え、土屋卓久 GRC 教授に後を託しました。23 年というのは、全国の大学附置研究所長・研究センター長の最長在任記録かと思われます。多少は雑用から解放されるかと思いましたが、4月に設置された「先端研究院」院長を拝命し、一層忙しくなってしまいました。

本学に赴任したのが平成元年4月ですから、35年あまりになり、人生の半分を松山で過ごしたことになります。着任当初はモノもお金もなく、海外出張やパソコン購入などは全部自費だったことを思い出します。それでも前任地の旧帝大の古い体質から解放され、本学にきて自由に伸び伸び仕事ができたと大変有難く、その後の研究と人材育成の進展につながりました。

先端研究院院長の仕事は、このような環境を与えていただいた本学への最後の恩返しと考えています。大学の第一の使命は研究と人材育成であり、この点を堅持・発展させることが重要だと思います。もちろん地域貢献や産業界への貢献も、現在の大学に求められる重要な機能ですが、卓越した研究・教育機能と実績を有してこそ、これらの面でも大きな役割を果たすことができると信じています。地方にある大学として、本学がその特徴を最大限に活かして研究・教育機能の強化をすすめるとともに、地域社会や産業界にも大きく貢献するため、微力ながらお手伝いできればと思います。

令和6年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／氏名／職名	医学系研究科社会・健康医療情報学講座 木村 映善 教授

学長賞の栄誉に預かり、これまでの皆様のご支援に感謝するとともに、気の引き締まる思いしております。

私は、聴覚障害を抱えており、医学部在籍時代に医師としてやっていけるのか不安でいっぱいでした。今でこそAIが大きく進歩して聴覚障害をサポートするようなシステムが出ていますが、当時はそのような事は生きている間に実現するかどうかの未来予想図の中でのみだと思っていました。インターネットが今のように当たり前ではなかった時代、アナログの電話回線で最寄りのアクセスポイントに接続し、一瞬にして海の向こうのサーバに接続して、レアな情報を渉猟したり、顔も見ぬ人とコミュニケーションしたりすることを通して、データと通信の威力に気づかされました。そして医学界ではCTやMRI等コンピュータを駆使して映像化するという形態の医療機器が出てきました。そのような時代の曲がり角にあって、当時はそこまで言語化できなかつたものの、「人間の生体情報を電子化して、その情報への介入を通して治療する」という世界観を夢想するようになりました。究極的にはDNAは4種類の塩基の組み合わせでコーディングされており、生体の振る舞いをプログラミングしているとも言えます。心も感覚への反応を通して生起消滅しています。極端にいうと、全ては情報である、という見方もできるわけです。そこでコンピュータに関心をもって私はMedical Informaticsという道で、医学に貢献することができればと考えました。ただ、この学問はずっとマイナー扱いで、最近になって「リアルワールドデータ(RWD)」というキーワードとともに認知されるようになってきていると感じております。RWDとは、通常の診療業務などの過程で発生したデータであり、本来は研究利用を想定していないものです。診療現場の情報化が進んできたこと、統計処理やデータ分析手法が発達してきたことにより、RWDからもエビデンスを導出できるのではないかとされるようになりました。

私は医学部附属病院の医療情報部部長と医療情報学講座教授という二足の草鞋を履いています。臨床現場からよりデータ環境を、データ分析からよりよい医療を実現すべく、それに関わる人材を増やすべく臨床と研究と教育の間を行き来しております。大変忙しくストレスも大きいのですが、生きがいを感じております。そして、4年前に愛媛大学として教授として就任して以来、バイオバンク事業、愛媛リアルワールド構想、愛大コーホート研究、ヘルスケアデータサイエンス講座、データサイエンスセンターなどの立ち上げに寄与してきました。いずれも萌芽的な段階ではありますが、愛媛大学が全国に対してプレゼンスを示せるものとなりますよう、これからも取り組んでまいりたいと思います。

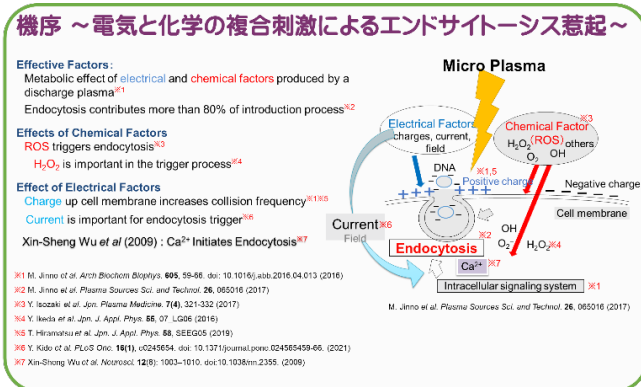
表彰区分	研究活動
所属／氏名／職名	大学院理工学研究科（工） 神野 雅文 教授

プラズマ分子・遺伝子導入法の研究

受賞者は、2010年より放電プラズマによる細胞への分子・遺伝子導入現象(以下、プラズマ分子・遺伝子導入)の解明と実用化の研究に取り組んできた。この現象は2002年に大手製薬企業で発見され、バイオベンチャー企業で実用化のための開発が続けられていたが、再現性、安定性などに問題があり機序の解明の前にこれらの問題解決が必要な状況にあった。このバイオベンチャーの技術顧問として開発を指導していた受賞者の恩師から2010年に遺言として研究開発を受賞者が引き継いだ。実用化のための研究開発を加速させるために、2016年に受賞者は愛媛大学発ベンチャー企業の株式会社アイジーンを設立して開発体制を強化するなどして、15年の歳月をかけて2024年の10月にようやく研究用理化学機器としてのプラズマ分子・遺伝子導入装置の発売に至ったものである。

この間、本技術の機序解明や応用に関して、科学研究費補助金の新学術用域「プラズマ医療科学の創成」の領域提案型研究に2課題、基盤研究(A)に2課題、挑戦的研究(萌芽)に1課題、AMEDで2課題、JKAの研究助成に2課題の合計9課題で研究代表者として採択され、科研費の学術変革領域(A)の計画研究に1課題、基盤研究(B)に2課題、基盤研究(C)に6課題、挑戦的萌芽研究に1課題、経済産業省の戦略的基盤技術高度化支援事業に1課題、市村清新技術財団の研究助成に2課題、それぞれ分担研究者として採択されている。

これらの研究課題の成果として、放電プラズマを細胞や生体に作用させることで、電流と活性酸素種による複合刺激により細胞の自発的な外部分子の取り込み機構であるエンドサイトーシスが惹起されていることを世界で最初に発見した。さらに、細胞の自発的な外部分子の取り込みであることから導入された遺伝子が偶発的に染色体に組み込まれる”ランダムインテグレーション”を生じることなく、染色体を汚染しないクリーンな遺伝子導入がなされていることを実証するなど、この分野の研究を牽引している。これらの実績により、国内外の学術集会で招待講演を多数依頼され、また、REVIEW論文や解説記事も執筆するなど、プラズマ分子・遺伝子導入法の世界的第一人者として活躍している。今後は、この手法の植物応用や、さらなる機序の解明などの学術面での研究進展に加えて、遺伝子・再生医療用途や美容健康用途に向けた装置の開発などでのさらなる活躍が期待される。



プラズマ分子遺伝子導入装置
LINACYTE 3MC

令和6年度 学長賞

表彰区分	研究活動
所属／氏名／職名	プロテオサイエンスセンター 東山 繁樹 教授

東山繁樹博士は、2002年4月に医学部教授（第二医化学講座）として着任され、今日までの23年間に渡り、愛媛大学の教育、研究推進に大きく貢献されておられます。

教育においては、医学部、及び大学院医学研究科において質の高い、熱意に溢れた教育を推進され、Best Teacher 賞特別表彰を受けておられます。また、高大連携事業にも積極的に取り組み、高校生の研究指導にも熱意を持って取り組まれてきました。大学運営では、医学部でのプロテオ医学研究センター設立を先導し、その後、無細胞生命科学工学研究センターとの融合によるプロテオサイエンスセンター設立に遠藤弥重太特別栄誉教授とともに尽力され、現在のプロテオサイエンスセンターの礎を築かれました。愛媛大学の生命科学研究推進に大きく貢献されてきました。

研究面においては、これまでに細胞増殖因子 Heparin-binding Epidermal Growth Factor-like Growth Factor (HB-EGF)、Neuregulin2、Neuregulin6 を発見し、愛媛大学にて「EGFR トランス活性化」の分子機構、また細胞膜貫通型増殖因子 EGF ファミリーの「レムナントペプチドシグナル」の発見等、新たなシグナル伝達経路を解明されました。またこれらの研究成果は、動脈硬化、心肥大および拡張型心筋症、表皮乾癬および創傷治癒病態、血管新生疾患、がん増殖等、幾つもの疾患病態の分子機構解明に繋がられ、**Science, Nature Med., Nature Methods, Cell Metabolism, J Cell Biol., EMBO J., ProNAS** など多くのトップジャーナルをはじめとする280報以上（愛媛大学着任後170報以上）に及び原著論文として発表されておられます。さらには、**Cold Spring Harbor Conference (2001)、Gordon Research Conference (2009, 2013)**、など世界トップレベルのConferenceで招待講演を行なっておられます。このように、極めてオリジナリティの高い世界的な研究を展開し、増殖因子研究に新たなページを加えられるとともに、愛媛大学の名を世界にアピールしてこられました。また、文部科学省科学研究費・基盤研究を始め、特定領域研究、新学術領域研究（研究領域提案型）、挑戦的研究（萌芽）及び（開拓）、JST さきがけ21 研究、JSPS 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム、日本医療研究開発機構(AMED) 次世代がん医療創生研究事業(P-CREATE)、さらには三菱財団、上原記念生命科学財団、内藤記念科学振興財団、武田科学振興財団等多くの民間財団研究助成を多数獲得し、愛媛大学での研究発展に多大なる貢献をされてきました。

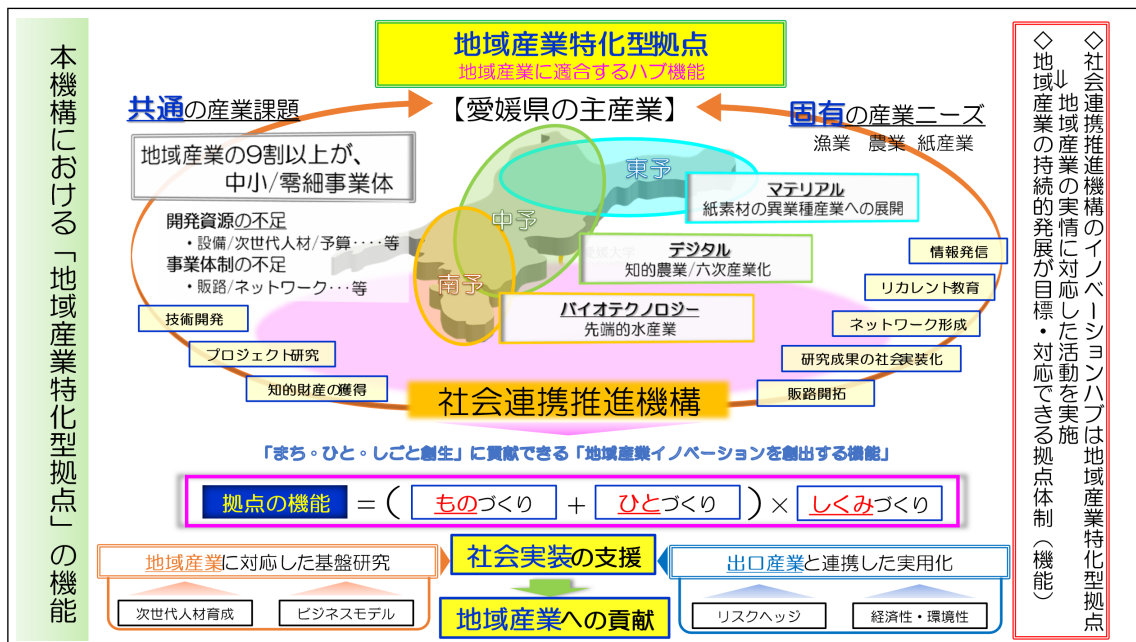
このように、愛媛大学において20年以上に及び国際的な研究を継続され、十分な成果を社会に発信し続けて来られました。

令和6年度 学長賞

表彰区分	地域連携活動
所属／氏名／職名	紙産業イノベーションセンター 内村 浩美 教授、 藪谷 智規 教授、 伊藤 弘和 准教授、 福垣内 暁 准教授、 深堀 秀史 准教授、 秀野 晃大 講師、 地域協働支援部地域協働課 高橋 勇一郎 チームリーダー

紙産業イノベーションセンターは、平成26年に4月に社会連携推進機構（当時）の地域産業特化型研究センターとして四国中央市に開設されました。地場産業と密接に連携して研究開発と社会実装、産業人材育成を推進することを目的としており、日本一の紙のまちである四国中央市で、企業等ネットワークのハブとして活動しています。

社会連携推進機構が経済産業省の「第5回 J-Innovation HUB 地域オープンイノベーション拠点」(※)に申請するあたり、紙産業イノベーションセンターが主体となって申請書を取りまとめ、採択に至りました。紙産業イノベーションセンターでは拠点視察や広報対応を積極的に行い、地域に広く開かれた拠点として、連携と協働を進める社会連携推進機構の活動促進に努めた結果、経済産業省からは「県内の産業に対して地に足がついた支援を行っている」と高く評価されています。



また、内村浩美センター長は、紙産業イノベーションセンターにおける長年の地域密着型の実践教育や研究開発の功績が認められ、四国中央市から四国中央市功労賞を受賞しました。これからも紙産業イノベーションセンターでは、地域の課題解決や地域経済の振興等を目指し、地域に立脚した紙産業の連携拠点としての活動を拡充していきます。

※地域オープンイノベーション拠点選抜制度：大学等を中心に企業ネットワークのハブとして活動している産学連携拠点を評価・選抜する制度



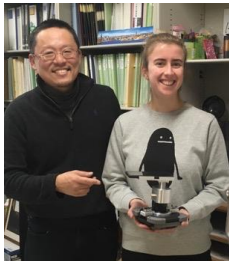
令和6年度 学長賞

表彰区分	国際連携活動
所属／氏名／職名	大学院理工学研究科（理） 座古 保 教授

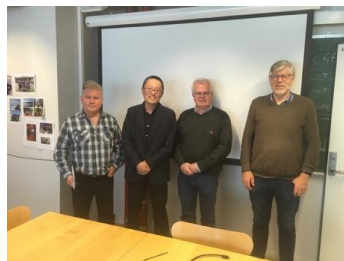
以下に記すような、国際連携活動を行ってきた。

- ノルウェー科学技術大学自然科学部（ノルウェー）との国際交流協定締結を主導（2020）。
- 長庚大学（台湾）との国際交流協定締結を主導（2023）。
- 日本学術振興会外国人再招へい事業（BRIDGE Fellowship Program）により、Mikael Lindgren 教授（ノルウェー科学技術大学）を客員教授として受け入れ（2018）。またサバティカル制度を利用し、2024 年にも同氏を客員教授として受け入れ。
- 協定校より交換留学生（Karsten Sættem Godø さん（ノルウェー科学技術大学修士学生））受け入れ(2024)。
- 理学部から協定校（ノルウェー科学技術大学）への短期研修を引率(2023)。
- 理学部から協定校（長庚大学）への短期研修を引率予定（2024（予定））。
- 長庚大学へ指導学生（理工学研究科（理学系）博士前期課程）を短期派遣（2023）
- 日本学術振興会外国人特別研究員（戦略・欧米短期）制度により、留学生（Nadine Lobsiger さん（スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETH Zurich)博士学生））受け入れ（2019-2020）。

今後も、さらなる連携発展および深化に貢献したいと考えている。



Nadine Lobsigerさんと



NTNUの先生方と



Mikael Lindgren教授と



Karsten Godøさんと

令和6年度 学長賞

表彰区分	医療活動
所属／氏名／職名	救急航空医療学講座、救急医学講座、児童精神医学講座、薬剤部、看護部、診療支援部、医事課、栄養部

医学部附属病院では、能登半島地震における被災地の救援活動のため、日本医師会災害医療チーム（JMAT）、災害派遣医療チーム（DMAT）及び災害派遣精神医療チーム（DPAT）を結成し、被災地支援活動を行ってきた。

後方支援を含め被災地支援にあたり、特に貢献のあった部署の業績は以下のとおりである。

【救急航空医療学講座、救急医学講座、児童精神医学講座、薬剤部、看護部、診療支援部、医事課】

能登半島地震において、被災地にて適宜、日本医師会災害医療チーム（JMAT）、災害派遣医療チーム（DMAT）及び災害派遣精神医療チーム（DPAT）の活動を行い、被災地支援に貢献した。

【栄養部】

能登半島地震において、本院から被災地に派遣した教職員の後方支援に貢献した。